3．京田辺市興戸２号墳の再検討

諫早　直人・下垣　仁志・吉永　健人

1．はじめに

興戸２号墳は、京田辺市興戸山添に所在する古墳時代前期後半の円墳で、興戸古墳（梅原 1955）や寿命寺古墳（田辺町郷土史会 1959）とも呼ばれる。標高 88m、甘南備山（標高 221m）から東方向にのびる丘陵の先端に築かれており（図１）、眼下には古墳時代の集落遺跡でもある興戸遺跡、さらに東方には木津川を望む。同一丘陵上には北西に接する墳長 24m の前方後円墳である１号墳（鷹野 1982）や、発掘の結果、弥生時代後期の方形台状墓であることが明らかとなった５号墓（奥村ほか 1981）など、１基の弥生墳丘墓と８基の古墳が確認されており（京都府教育委員会 2003）、２号墳はそれらの中では最大規模、かつ唯一副葬品を含むまとまった遺物が出土している古墳として戦前から知られる。

しかしながら大正年間に大規模な盗掘を受けて以来、きちんとした調査がおこなわれることのないまま間歇的に遺物が採集された結果、出土遺物は市外の複数の機関で所蔵され、研究者でもその全容を把握することは困難な状況にある。とりわけ大正年間に興戸２号墳を含む複数の古墳から盗掘された後、押収された「北和城南古墳出土品」については長らくその全容が不明であったが、近年、当時の裁判資料や奈良国立博物館が所蔵する出土遺物に対する綿密な検討がおこなわれ、その詳細を知ることが可能となった（奈良国立博物館 2017、鐘方ほか 2018）。現在、遺物所蔵機関の全面的な協力のもと、京田辺市史編さん事業の一環で、興戸２号墳の再検討を進めており、ここにその成果の一部を報告する。なお本報告にあたり、下垣仁志氏（京都大学大学院文学研究科）には玉稿を賜ったほか、京都大学総合博物館での調査にあたっては村上由美子氏、坂川幸祐氏（以上、京都大学総合博物館）、吉井秀夫氏（京都大学大学院文学研究科）より多大なるご協力を賜った。また、京都府立山城郷土資料館での調査につ

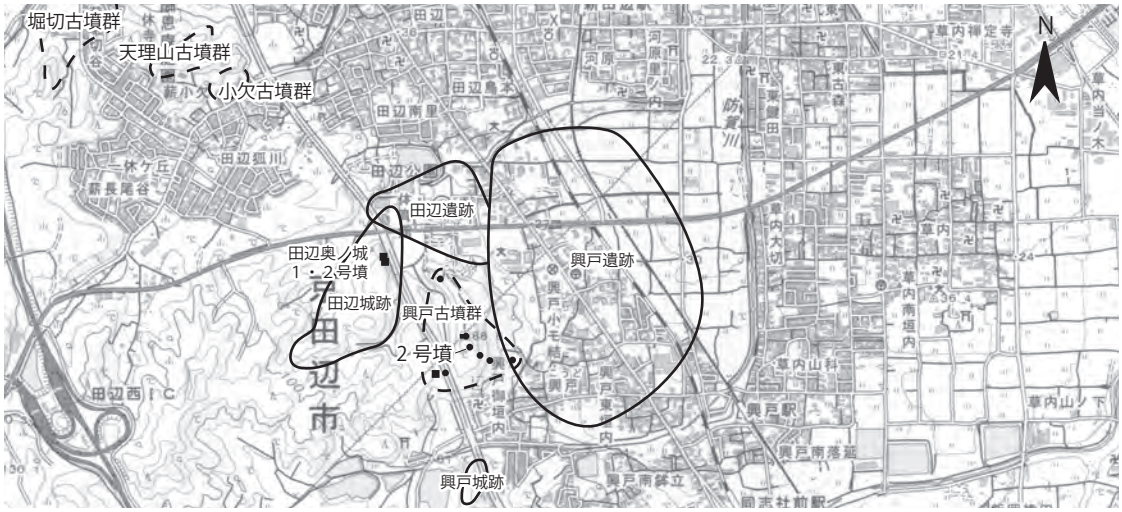

図１　興戸２号墳の位置（S=1/25000）

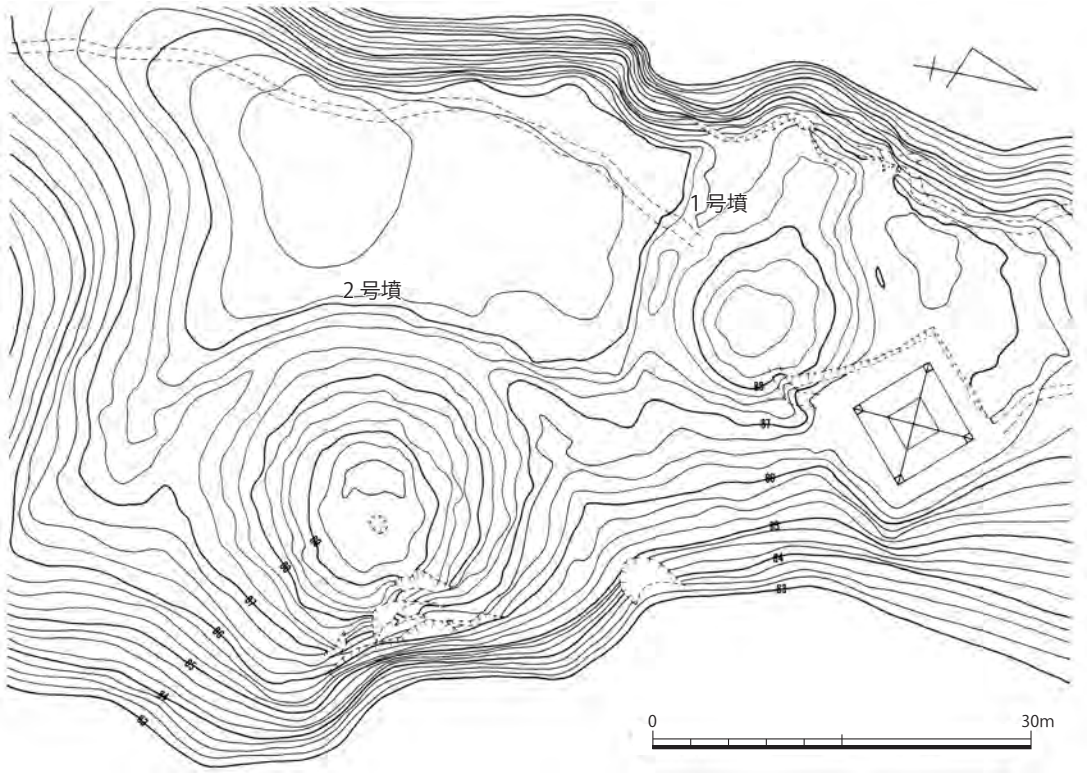

図２　興戸１・２号墳測量図（S=1/600）（鷹野 1982）

いては細川康晴氏のご高配を得た。記して感謝したい。

2.　既往の調査

（1）古墳の概要

1981 年度におこなわれた測量調査によれば、興戸２号墳は直径約 28m、高さ約 2.5m、西側に周溝がめぐる円墳とのことである（図２）（鷹野 1982）。墳丘に対する発掘調査はおこなわれていないが、墳頂部北側から家形埴輪が採集されていることから、墳頂には埴輪が樹立されていたとみられ、葺石も施されていた可能性が高い。1914 年（大正３）夏頃に大がかりな盗掘がなされたことがいわゆる皇陵盗掘事件をきっかけとする盗掘者の逮捕とその後の裁判によって明らかとなっており（鐘方ほか 2018）、墳頂部には大きな陥没坑が今も認められる。1943 年（昭和 18）に京都大学考古学教室の協力を得て京都府史跡調査会がおこなった現地調査の際に、この盗掘坑の断面観察がおこなわれており（図３）、埋葬施設は割竹形木棺を内包する粘土槨とみられる（梅原 1955）。盗掘者に対する尋問調書の検討から東北東を頭位として、北側に鏡が、その南に石釧、管玉、鍬形石、車輪石が順に配されていたという副葬品配置案が提示されている（髙木 2018）。なお埋葬施設は墳頂部中央より南東にやや偏った位置にあることから、埋葬施設がもう１基存在する可能性もある（梅原 1955）。

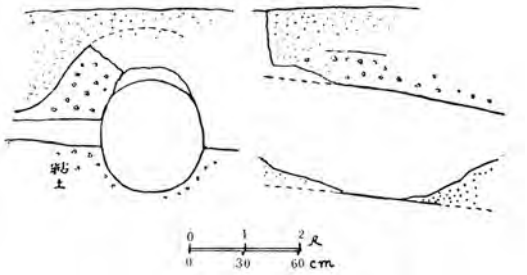

図３　盗掘坑の断面図（梅原 1955）

表１　興戸２号墳出土遺物

品　目	個体数	所　蔵	接合関係
銅鏡（内行花文鏡）	3	①-1・2	①-1・2
管玉	28以上	①-3、③	
滑石製臼玉	1	①-2or3	
鍬形石	8～9	①-2・3、②、③	①-2・3、②、③
車輪石	3～5	③	
石釧	25～35	①-2・3、②、③	①-2・3、②
筒形石製品	1	③	
紡錘車形石製品	4	③	
鉄剣	1	①-3	
円筒埴輪	2以上	①-2・3、②	
家形埴輪	2以上	①-2・3、②	①-2・3、②

（２）出土遺物の概要

興戸２号墳出土遺物ないしその可能性が高い遺物は、現在、①京都大学総合博物館（京都大学文学部 1968）、②京都府立山城郷土資料館（鷹野 1982）、③奈良国立博物館（奈良国立博物館 2017）が所蔵している。すなわち、① -1：1915 年（大正４）に森本正太郎氏から梅原末治氏を介して購入した伝南山城出土銅鏡２面、① -2：片山長三氏が採集し、1942 年（昭和 17）に京都大学考古学教室へ寄贈した円筒埴輪片、家形埴輪片、銅鏡片、石釧片など、① -3：1943 年（昭和 18）に京都大学考古学教室の協力を得て京都府史跡調査会がおこなった調査の際に盗掘坑から出土した銅鏡片、管玉片、鉄剣片など、②粟野謨氏が採集した鍬形石や車輪石片、埴輪片、③：1914 年（大正３）の盗掘押収品で、1937 年（昭和 12）に奈良地方裁判所から奈良帝室博物館に引き渡された「北和城南古墳出土品」の一部石製品である。なお、① -2・3 は早い段階で一括して保管されていたとみられ、両者を厳密に区別することは難しい。

このうち① -1 の銅鏡については、① -2 の銅鏡片と一部接合することなどから、興戸２号墳出土遺物であることが確定している（梅原 1955）。③は、髙木清生氏らによる検討によって鍬形石１点、筒形石製品１点、紡錘車形石製品４点が興戸２号墳出土品であることが確定し、このほかに管玉や複数の鍬形石、車輪石、石釧が含まれている可能性が高い（髙木 2018）。髙木氏らによって① -2・3、②、③の石製品の一部に接合関係が想定されたことも重要であり、2019 年４～６月に京都府立山城郷土資料館で開催された企画展「木津川流域の首長墳―最新の研究成果から―」において実際に接合することが確認されている。②の石製品は 1982 年に初めて紹介された資料で採集時期は明らかでないが、① -2・3 よりも②の方が質・量とも豊富なことから、髙木氏は粟野謨氏が遺物を採集したのは戦前、① -2・3 よりも前のことであろうと推測する。また、②の埴輪片については、粟野氏によって採集されたとされる円筒埴輪片・家形埴輪片の４片があり、近年北山大熙氏によって報告されている（北山 2022）。

最後に高木氏の検討をふまえつつ、今回明らかとなった出土品の概要を示しておきたい（表１）。（諫早直人）

3.　興戸２号墳出土遺物

出土遺物のうち、玉類を含む石製品については昨年度に報告をしているので（二村 2022）、ここからは石製品以外の出土遺物について報告する。

（１）鏡（図４～６）

本墳から３面分の銅鏡が採集されている。いずれも倭製鏡（仿製鏡）であり、すべて内行花文鏡である。このうち２面（鏡 A・B）は、筆者の前期倭製鏡中段階、おそらくは中段階新相に比定でき（下垣 2011）、前期後葉後半（≒和田編年４期（和田 1987））の所産である。この２面は連作鏡であろう。もう１面（鏡 C）は細片のため位置づけが難しいが、鏡 A・B と

図４　興戸２号墳出土鏡Ａ（S=1/1）

対照するかぎり、やはり中段階新相とみておくのが無難である。

①鏡Ａ（図４）

七弧内行花文鏡である。京大登録番号 1018（小野山ほか 1968）、歴博集成番号の「京都 178」である（白石ほか 1994）。

遺存状況　　縁部の６分の１ほどが欠失しているほかは残存している。視認できるヒビは１箇所だけだが、銅質の悪さと銹化のため鏡体が脆くなっている。鏡背面のほぼ全面が銹に覆われ、鏡面に平織りの布帛が付着している。色調は鈍い黄緑色を呈し、破面は緑灰色を呈する。

鋳上がり・調整　　鋳上がりは比較的良好で、文様もよく鋳出されている。仕上げも丁寧に研磨されている。

法量・重量　　面径 12.2cm、鏡背径 11.8cm、外区径 9.8cm、内区外周径 8.3cm、内区径 6.5cm、縁部の反り約 0.2cm をはかる。外区厚と内区厚は 0.3 ～ 0.15cm であり、薄く平板な

つくりである。現重量は約 128g である。

縁部・外区　縁部はわずかに反りあがる平縁であり、端面幅 0.35cm をはかる。外区～内区外周文様帯は、外側から細い無文帯、鋸歯文帯、段落ちして櫛歯文帯、珠文帯で構成される。

内区文様　内区には平滑な円弧を 7 単位めぐらす。弧文（内行花文）は底部幅 2.8 ～ 2.9cm だが、ひとつだけ明らかに短く 2.4cm しかなく、割付ミスがうかがえる。弧間に「大」字の横線両端を内弯させた「対称文 3 式」（下垣 2011）を配する。乳はない。

鈕区・鈕　鈕区は珠文帯と櫛歯文帯で構成される。鈕はやや扁平な半球形を呈し、径約 2.0cm・高さ約 0.8cm をはかる。鈕孔は下底面が鏡背面と一致し、底辺幅 0.6cm、高さ約 0.35cm の長方形を呈する。

位置づけ　諸氏の分類に照らすと、CB Ⅱ式（森 1970）、B 類 3 式（清水 1994）、Ⅲ類省略系（林 2000）、C 系（森下 2002）、B 式（下垣 2011）になる。

②鏡 B（図 5）

六弧内行花文鏡である。京大登録番号 1019（小野山ほか 1968）、歴博集成番号「京都 179」（白石ほか 1994）である。鏡 A とともに南山城出土とされてきた鏡である。1943 年に採集された「鏡 C」の外区片（京大登録番号 5669）が本体に接合したことで、本鏡が興戸 2 号墳出土鏡であることがほぼ確定した[1)]（梅原 1955）。

遺存状況　縁部が 1 割程度しか残存せず、内区外周も 3 割程度しか残存していない。内区と鈕はほぼ完存している。非常に薄く、銹化と相まってすこぶる脆弱な状態である。色調は淡い黄緑色を呈し、破面は緑灰色を呈する。

鋳上がり・調整　鋳上がりは比較的良好で、仕上げの研磨も丁寧である。

法量・重量　最初の梅原報告において「四寸六分」（約 13.9cm）と報告された（梅原 1955）が、その後なぜか 12.0cm に変更され（岡崎 1977）、その数値が継承されてきた（高橋 1989、白石ほか 1994、下垣 2016 など）。今回あらためて計測したところ、約 13.8cm となり、梅原報告が正しいことが判明した。間違った数値を公表したこと（下垣 2016）をお詫びする。

面径約 13.8cm、鏡背径 13.3cm、内区外周径約 10.6cm、内区径 8.3cm をはかる。もっとも薄い部分で 0.1cm しかなく、鏡 A にもまして薄く平板なつくりである。現重量は約 86g である。

縁部・外区　縁部はわずかに反りあがり、端面幅 0.5cm をはかる。外区はなく、内区外周文様帯は、外側から細い無文帯、鋸歯文帯、珠文帯で構成される。

内区文様　内区には平滑な円弧を 6 単位めぐらす。弧文（内行花文）は底部幅 4.0 ～ 4.2cm 程度である。弧間に「対称文 3 式」を配する。乳はない。

鈕区・鈕　鈕区は珠文帯と櫛歯文帯で構成される。鈕はやや扁平な半球形を呈し、径約 2.3cm、高さ約 0.85cm をはかる。鈕孔は下底面が鏡背面と一致し、底辺幅 0.7cm、高さ約 0.45cm の長方形を呈する。

位置づけ　諸氏の分類に照らすと、B Ⅱ式（森 1970）、B 類 2 式（清水 1994）、C 系（森下 2002）、B 式（下垣 2011）になる。

図５　興戸２号墳出土鏡Ｂ（S=1/1）

図６　興戸２号墳出土鏡Ｃ（S=1/1）

③鏡Ｃ（図６）

内行花文鏡である。京大登録番号 5669（小野山ほか 1968）、歴博集成番号「京都 177」（白石ほか 1994）である。1943 年に本墳で採集された鏡片である。

遺存状況　縁部と内区などの小片からなる。微細片もあわせると 20 片ほどになる。鏡 A・B と別個体の破片が主体だが、鏡 B のものとおぼしき微細片もふくまれる。色調は黄灰色を呈し、破面は緑灰色を呈する。

法量・重量　縁部がごくわずかしか残存していないため正確な面径は不明だが、11.9cm 程度になる。

縁部・外区　縁部は端部がわずかに肥厚する平縁であり、端面幅 0.35cm をはかる。外区～内区外周は不明。

内区文様　円弧の一部が残存しているので、内行花文鏡であることがわかる。ただし弧数は不明。弧間に３点からなる珠文（「珠文２式」（下垣 2011））を配する。乳はない。

鈕区・鈕　鈕区も鈕も欠失している。

位置づけ　細片のため不明であるが B 式（下垣 2011）である。（下垣仁志）

（2）鉄製品（図7）

鉄剣の破片が3点出土している。切先付近の破片が2点あることから、少なくとも2個体分の破片が含まれているとみられる。

1は茎部付近の破片である。柄や鞘にかかわる有機質は付着していない。強く内傾する刃部右上の破片については、接合関係の再検討が必要である。残存全長9.3㎝、重さ48.7g。刃部は残存長8.4㎝、最大幅3.1㎝、厚さ0.5㎝、茎部は残存長0.9㎝、残存幅1.5㎝、厚さ0.6㎝。

2は切先付近の破片である。鞘にかかわる有機質は付着していない。残存長8.4㎝、最大幅2.8㎝、厚さ0.4㎝、30.8g。

3は切先付近の破片である。鞘にかかわる有機質は付着していない。残存長6.2㎝、最大幅2.9㎝、厚さ0.4㎝、40.8g。（諫早）

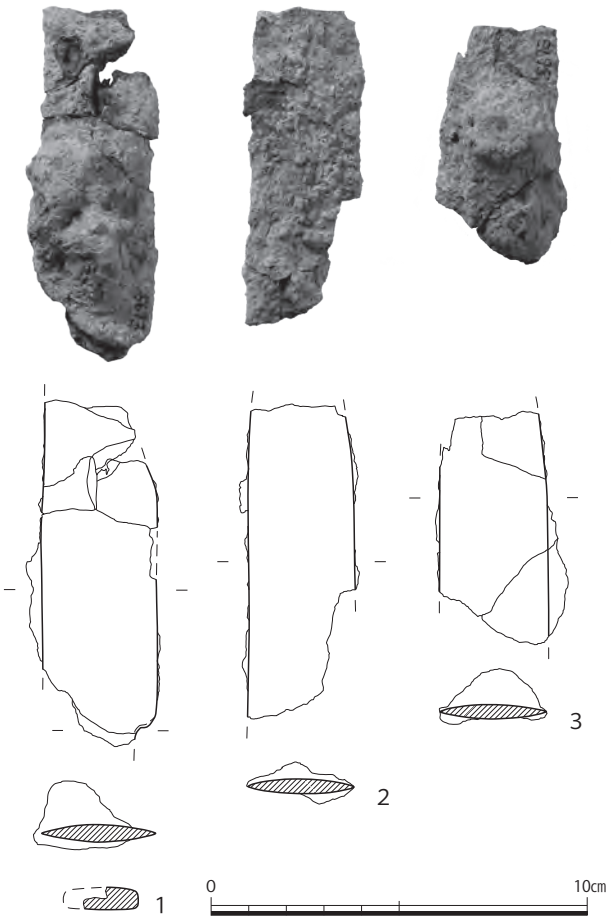

図7　興戸2号墳出土鉄剣（S=1/2）

（3）埴輪（図8～13、表2）

円筒埴輪、形象埴輪の破片が京都大学総合博物館および山城郷土資料館に保管されている。京都大学総合博物館が保管する資料（以下、「京大博資料」）には、先述のように1943年に梅原末治らが採集し、坪井清足によって接合復元された資料（梅原1955）と、片山長三が寄贈した資料がある。これらのうち円筒埴輪については検討に耐えうるような資料はなく、梅原によって報告された円筒埴輪も今回の調査では確認できなかった。形象埴輪には家形埴輪と不明形象埴輪が含まれる。山城郷土資料館が保管する資料（以下、「郷土資料館資料」）には、粟野謨が寄贈したとされる家形埴輪片および円筒埴輪片の4片が確認できており、これらについては近年整理・報告がおこなわれている（北山2022）。

今回はこれらのうち、まとまって得られている梅原報告の家形埴輪、およびそれと同一個体と考えられる資料について報告する。資料の経歴や今回おこなった復元の方法については別稿（本書第Ⅲ部第4章）で詳述しているため、そちらを参照されたい。なお、実測図の作成にあたっては、3Dモデルから出力したオルソ画像を下図に用いた。また、本資料の検討にあたっては、青柳泰介氏、東影悠氏（以上橿原考古学研究所）、泉眞奈氏（藤井寺市教育委員会）、上野あさひ氏（京田辺市教育委員会）に貴重な意見を頂いた。記して感謝の意を申し上げる。

資料の概要　興戸2号墳出土とされる家形埴輪片のうち、焼成や胎土の特徴からみて、一部を除いてほとんどが同一個体と考えられる。基部や下屋根付近に黒斑を有すことから、野焼

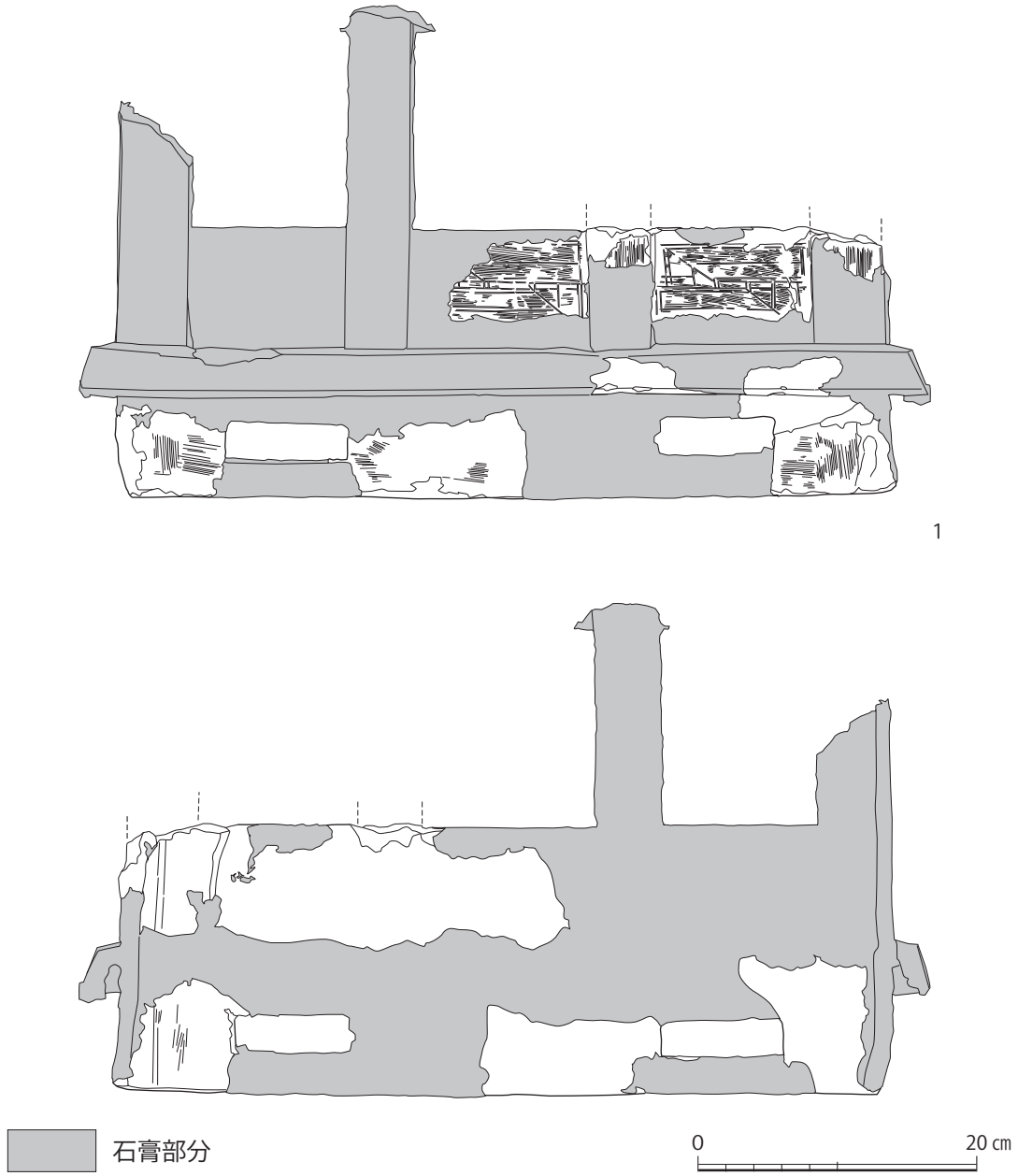

図８　興戸２号墳出土家形埴輪（１）（S=1/5）

き焼成であることが分かる。基本的に焼成は良好だが、部位によっては焼成が甘いためか、内外面が摩滅し情報が失われている破片もある。黄橙色～黄褐色を呈し、一部の破片には赤彩が施されている。以下では、部位ごとに報告をおこなう。

基部　　厚さ約 1.2㎝の粘土板もしくは粘土紐を積み上げて箱状に形成する。基底部中位には縦３cm ×横７cm 程度の方形透孔が穿たれる。接合する２～５より透孔同士の間隔は約 23cm と分かる。一方、７は透孔間隔が 14㎝程度と狭く、前者は平側、後者は妻側の基部に当たると考えられる。平側・妻側ともに透孔は２つ配置されていたと推定される。また、２と６は端部が屈曲していることから隅部付近と考えられ、一方の辺の外側に被せるようにして、もう一方の辺の粘土をつなぎ合わせて隅を形成していることが分かった。外面は１次調整タテハケ

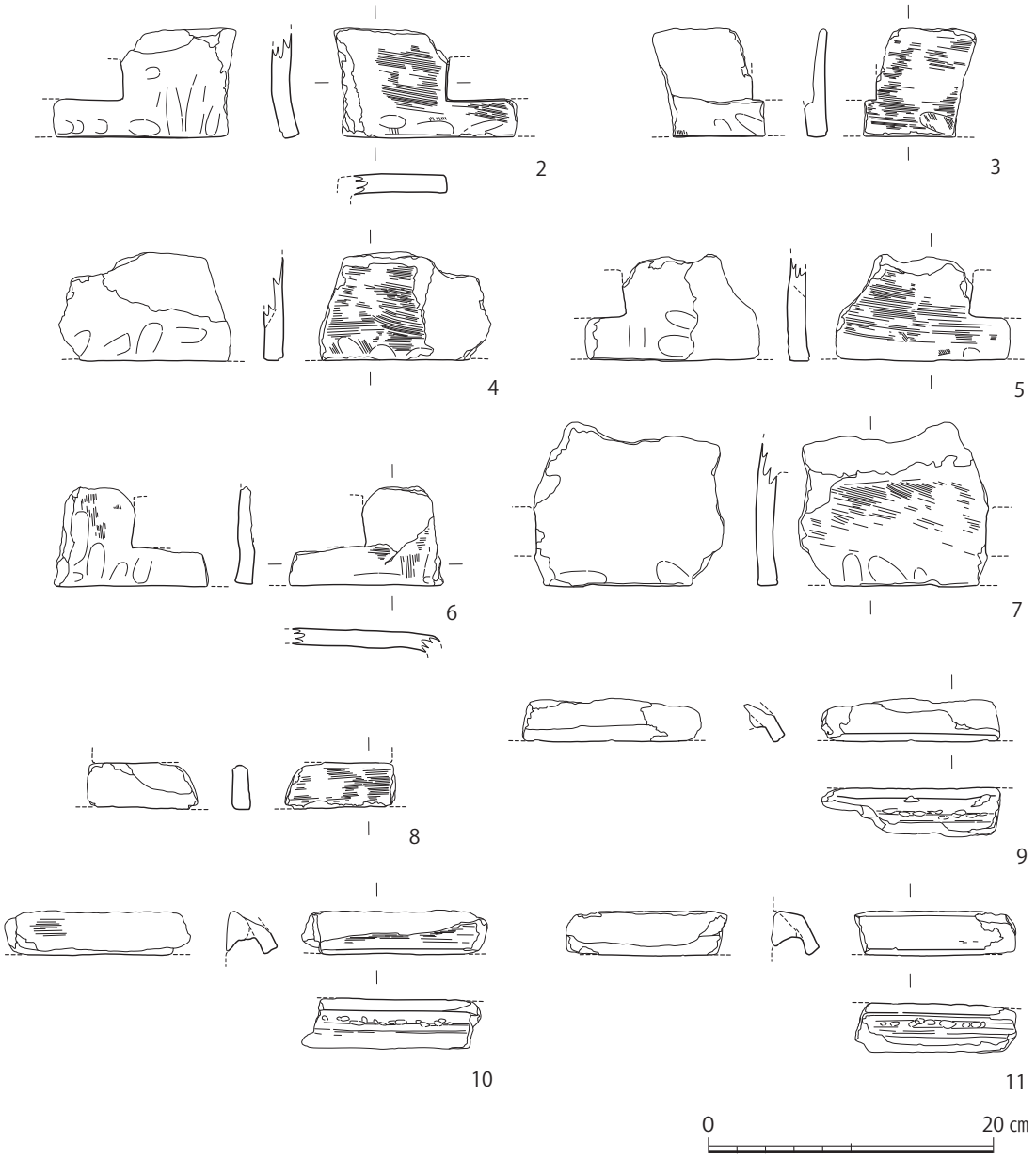

図９　興戸２号墳出土家形埴輪（２）（S=1/5）

のあと、ヨコハケないしはナナメハケが施される。内面はナデを基調とするが、一部ハケメが残る部分も認められる。

裾廻突帯　　高さ約 10cm の壁部外面に取り付けられる。壁から垂直に突出させるように粘土を貼り付けた後、斜め下方に屈曲させるように粘土を付加して形成する。剥離痕にハケメがみられることから、基部および壁部の外面調整がおこなわれた後に取り付けられたことが推測できる。

文様部　　開放部下の壁面に、先端 0.1㎝程度の串状工具を用いて線刻する。１は鍵手状文様と斜線を組み合わせて線刻表現されるが、12 ～ 15 には１にみられた斜線がないなど、施文パターンが異なっており、家の面ごとに文様を書き分けていた可能性がある。また接合関係にある 12 と 13 を比較すれば、柱を挟んで線対称にパターンが表現されていることがわかる。

柱　壁面に１cm 程のうすい粘土を貼り付けて角柱を立体的に表現する。粘土の貼り付けに際して、柱位置の目印とするために、壁面にあらかじめ線を引いている。側柱の柱幅はいずれも約５cm でそろうのに対し、隅柱（17・23）は、平側が幅約５cm、妻側が幅約３cm と異なる。いずれの柱も外面はタテハケで調整されている。また柱の貼り付け後、柱側面をヘラ状の工具で削るようにして整形しており、横断面が台形状になっているものが多い。側面にハケメが残っている資料があり、木目を有する工具で調整したことが推測できる。内面にはナデが施され、平滑に仕上げられている。

下屋根　壁面および柱の上端にかぶさるように下屋根を斜めに取り付ける。軒先の先端部から約３cm の部分には、粘土で段差をつけ、押縁を表現する。34 にはこの段差表現の位置を示す目印となる線刻が認められる。通有の家形埴輪では、軒先の先端部側が高くなるように段差表現をおこなう、もしくは段差を設けずに線刻で表現する例などが多いのに対して、本例は先端部側が低くなるように粘土で段差をつけている点で特徴的である。外面は摩滅しているものが多いが、37 などにはヨコハケが認められる。内面はナデで、特に壁面と下屋根の接合部分には丁寧なナデ調整が認められる。

上屋根　上屋根外面には、約２×２cm の正方形を格子状に線刻し、その正方形内に４～５本の平行線を引き、網代を表現する。全ての正方形内に平行線を施すのではなく、２マスずつ階段状に配置しているようである。また、一般的な家形埴輪の屋根にみられる網代文様は、平行線の向きを交互に違えながら表現することが多いが、本例はすべて同じ向きである点でやや特異である。妻側先端には幅約 2.5cm の破風板を貼り付け、上屋根から破風板の接合部分外面にはさらに粘土を貼り付けて段差を作り出している。また、45 は下屋根と上屋根との間に生じる妻側の三角形の空白部分を閉塞する粘土板と考えられる。三角形の各辺に粘土接合痕が認められることなどから、上屋根を形成したのちに妻側の空隙を閉塞する技法（青柳 2007）で、屋根部が閉塞されたと推測できる。外面には不定方向のハケ、内面にはナデが施されており、特に内面ナデ調整は粘土接合痕付近に顕著にみられる。

全形の復元　以上の破片資料をもとに全体像を復元すれば図 13 のようになる。本資料は梅原がかつて報告したように、３間×２間の入母屋造りの家形埴輪と推定される。各面の基部には２つの透孔が穿たれ、その上部には逆Ｌ字状に屈曲する裾廻突帯が巡る。壁面の柱間は全て開放され、その開放部下の壁面には鍵手状文様が線刻される。壁面上部には入母屋屋根が取り付けられ、上屋根外面には網代文様と考えられる線刻が施される。

今回の再整理によって梅原報告段階では不明な点が多かった妻側の様相が判明し、基部透孔の間隔、開口部（文様部）の幅、鍵手文様のパターンなど、平側と妻側で形態・表現が異なる箇所が存在することが判明した。上屋根妻側の閉塞部分の資料が新たに確認でき、屋根の製作技法が分かったことも成果の一つである。

家形埴輪の特徴と位置づけ　本資料の特徴として、まず基部の高さと透孔が挙げられる。本資料は高さ 10㎝程度の高い位置に裾廻突帯が取り付けられ、腰高な印象を受ける。基部の透孔も、通常は底面に沿って刳り取る形で半円もしくは方形透孔を表現することが多いが、本例は基部中央にくり抜くように方形透孔を穿つ点で、特徴的な形態といえる。

また、今回の再整理によって明らかとなった上屋根妻部の閉塞技法については、これまで

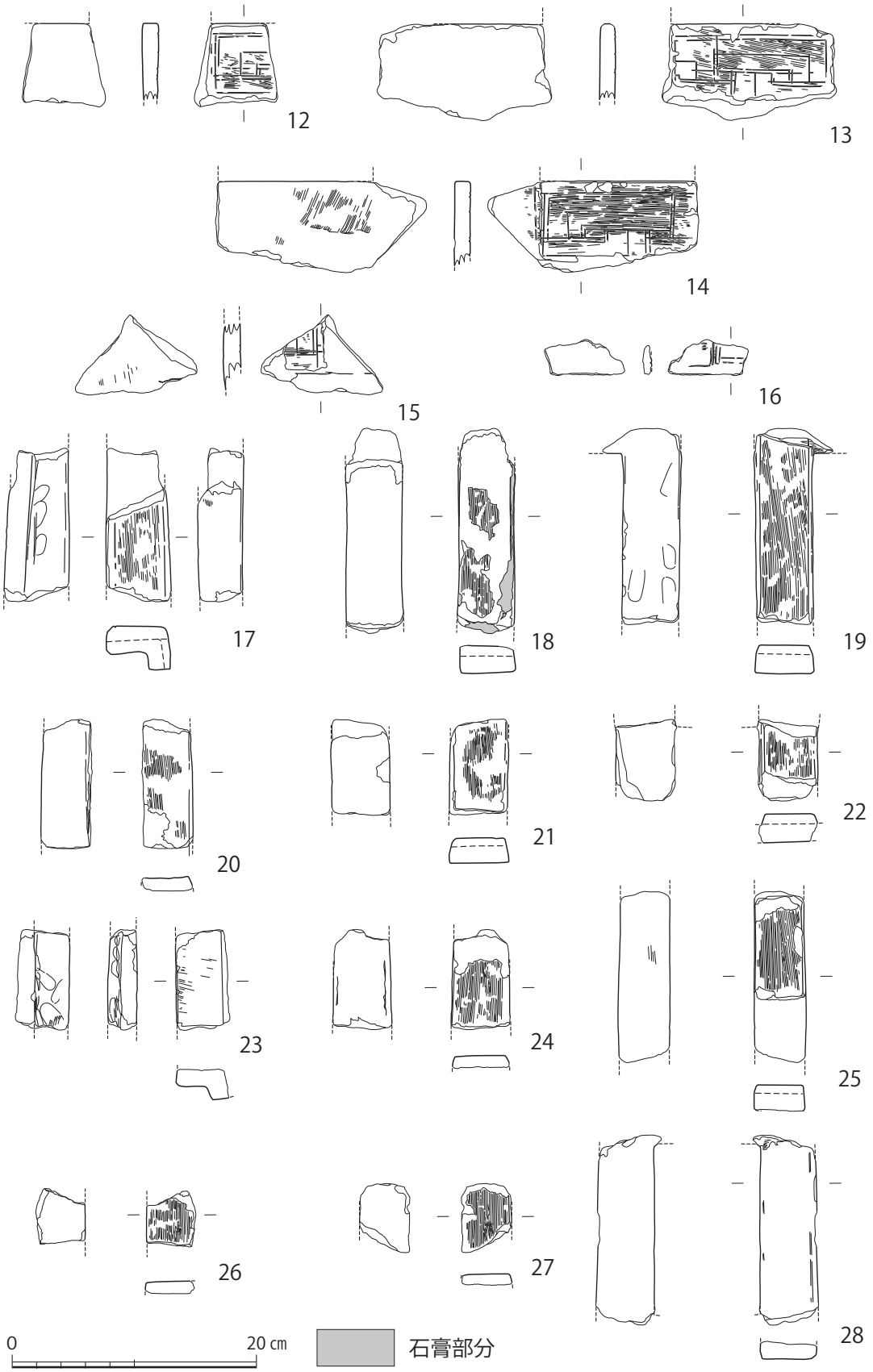

図 10　興戸２号墳出土家形埴輪（３）（S=1/5）

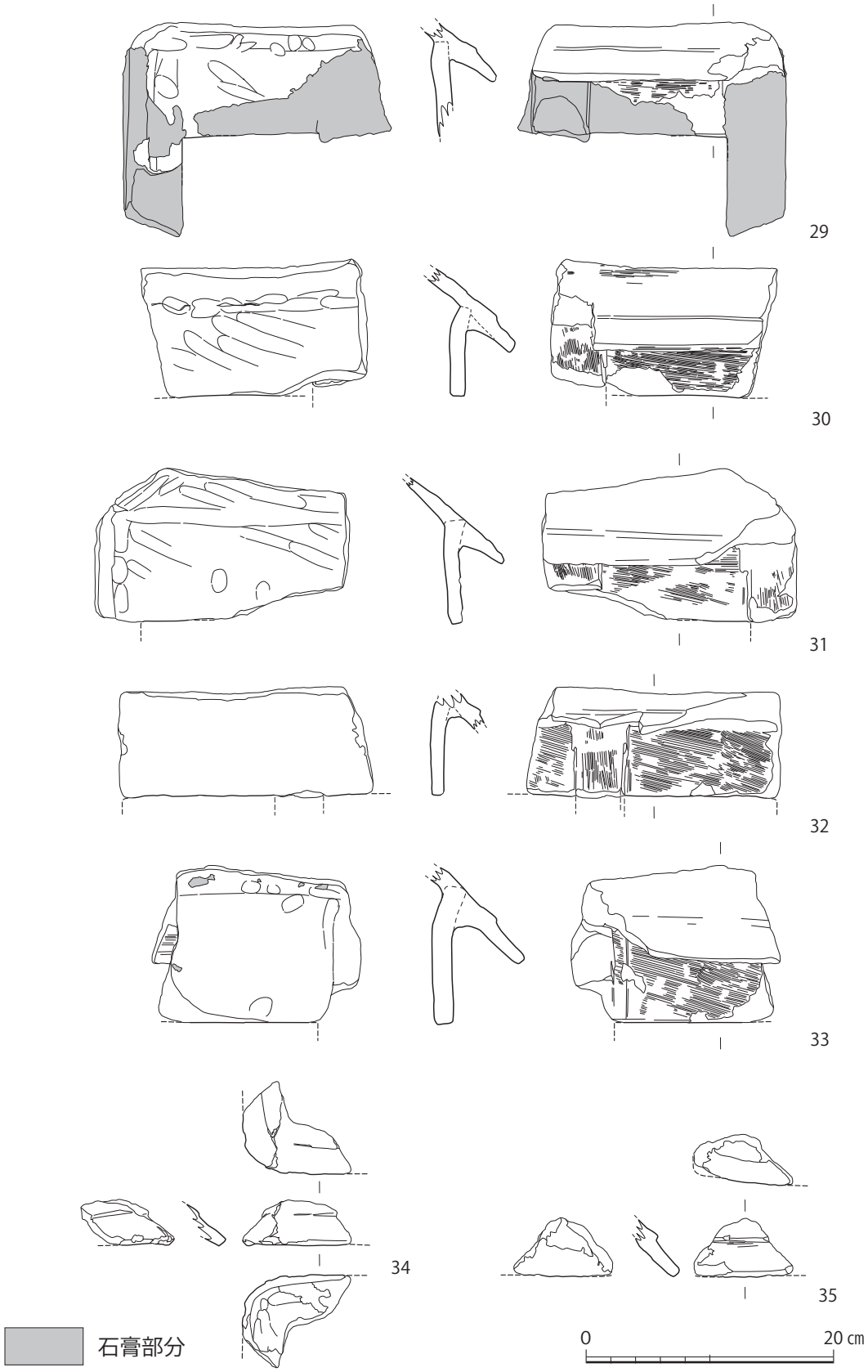

図 11　興戸２号墳出土家形埴輪（４）（S=1/5）

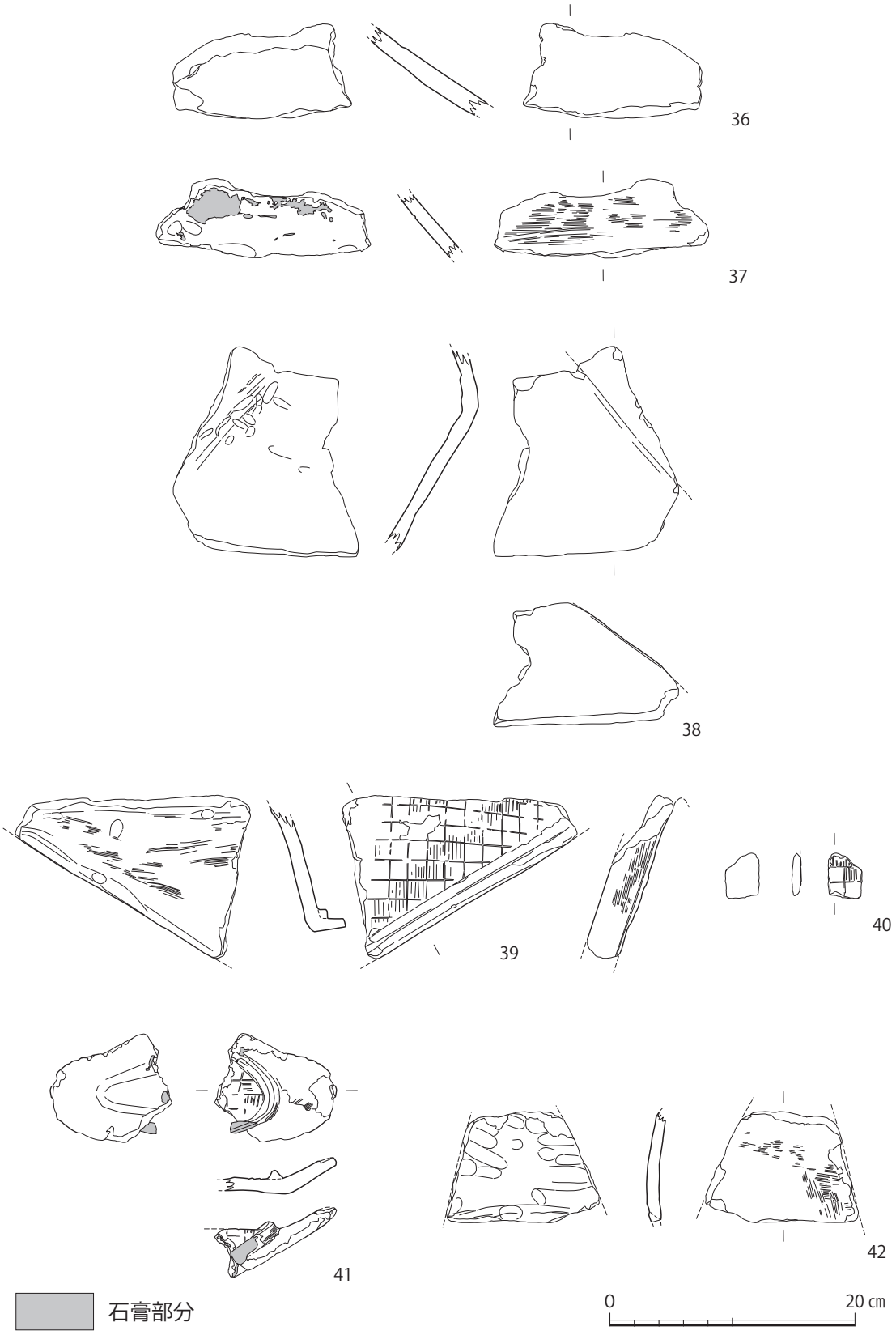

図 12　興戸２号墳出土家形埴輪（５）（S=1/5）

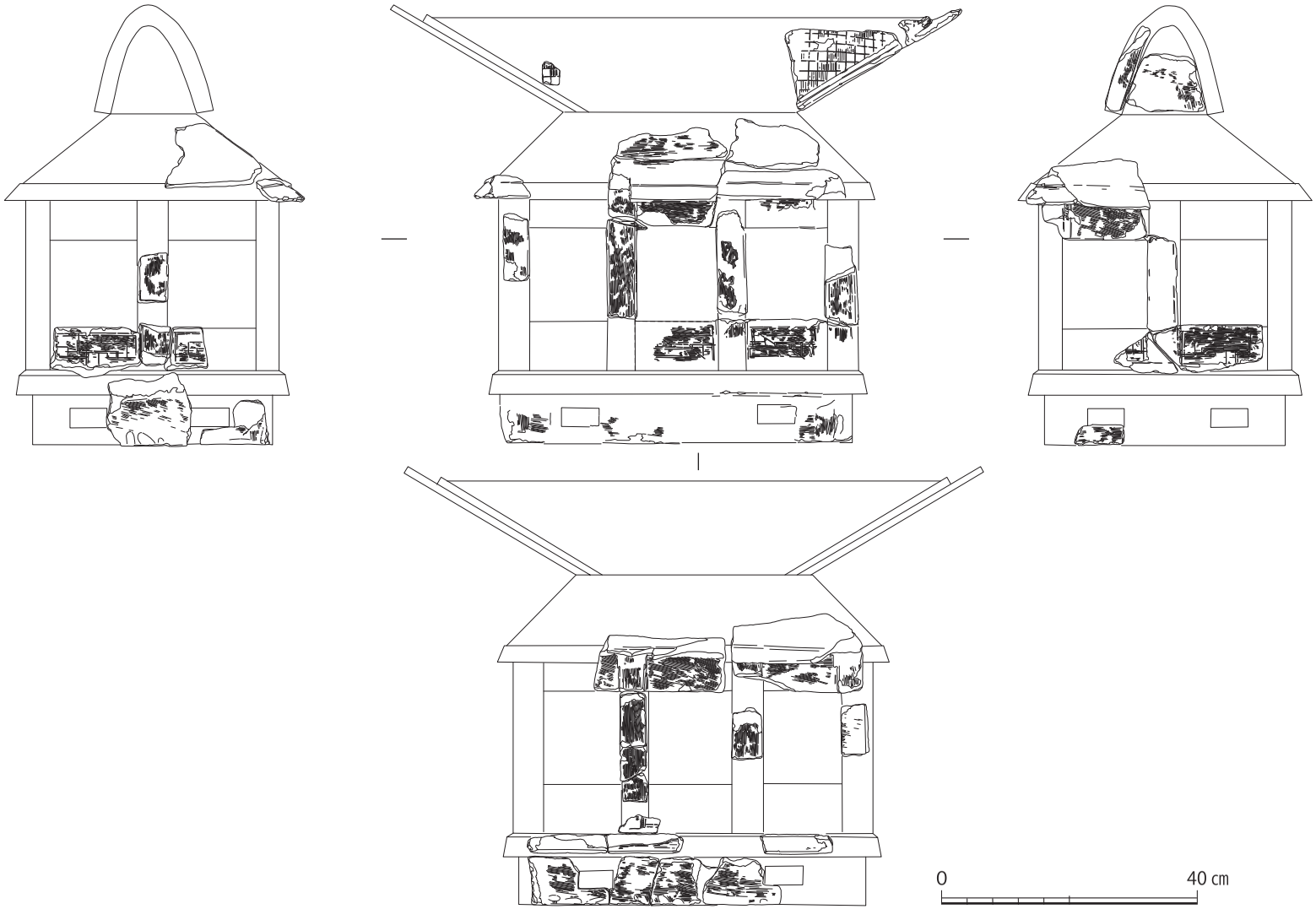

図 13　興戸２号墳出土家形埴輪復元展開図（S=1/10）

いくつかの分析がおこなわれてきた（青柳 1995・2007、岡村 1990）。青柳氏の分類によれば、上屋根を先に成形したのちに三角形に残った妻部の空間を粘土で閉塞する閉塞技法Ａ、先に下屋根から連続して粘土を積み上げておき、その後に上屋根を製作する閉塞技法Ｂ、閉塞をおこなわない閉塞技法Ｃがあり、本例は閉塞技法Ａにあたる。氏によればＡ→Ｂ→Ｃの順に漸次的に変化し、特にＡは古墳時代前期に多い技法とされる。

以上の特徴から製作時期を推測すれば、古墳時代前期末ごろ、埴輪編年Ⅰ期後半～Ⅱ期前半とみてよいだろう。上述した基部の高さについては、Ⅰ期段階の家形埴輪は弥生時代の家形土器の影響を色濃く受けて基部が高く作られることが多く（青柳 2020）、当資料もそうした脈絡で捉えられる可能性が高い。また、Ⅰ期新相に位置づけられる名古屋市中社古墳出土の家形埴輪は、透し孔の様相も含めて本例と類似しており、当資料の時期を考える上で示唆的な資料である。このほか、壁面の外面調整にヨコハケを用いる点、軒先の表現など、家形埴輪として定型化していない要素が見受けられ、家形埴輪のなかでも古相を示すことが指摘できよう。今回の整理では特徴の分かる円筒埴輪が確認できなかったものの、梅原が報告した円筒埴輪の図を見る限り、Ⅰ期後半～Ⅱ期前半とした時期に齟齬はないと考える。

山城郷土資料館資料の評価　今回報告できなかった資料のなかにも、家形埴輪と判断できる破片がいくつかある。近年北山氏によって報告された郷土資料館資料のうち、図 14 － 2 は本報告の資料番号 32 にあたり、今回の再整理で京大博資料と接合関係にあることが確認できた。一方で図 14 － 1・3 については、胎土や色調、焼成などの特徴から、明らかに別個体であることが実見により明らかとなった。形態的特徴においても、図 14 － 1 の資料には、本報告の個体にはなかった押縁表現があり、上屋根の網代文様の線刻パターンも異なっており、図 14 － 3 の資料は基部の特徴や柱の表現が本報告の個体とは大きく異なることが指摘できよう。

こうした点から、興戸 2 号墳出土とされる家形埴輪が、少なくとももう 1 個体存在することは間違いない。ただし、その製作時期については、焼成具合などからみて本報告の個体よりも新しい可能性が高く、このことは、北山氏によって報告された円筒埴輪片（図 14 － 4）にＢ種ヨコハケが認められることからも指摘できる。北山氏が述べるように、これらについては表採の時期や場所が不明な資料が多いため、本当に興戸 2 号墳に属する資料なのか、再検討する余地があろう。（吉永健人）

4.　おわりに

前号で報告した石製品（二村 2022）に続き、本稿では興戸 2 号墳から出土したほかの遺物（鏡、鉄剣、埴輪）についての整理、検討をおこなった。これで世に知られる興戸 2 号墳出土品のほぼすべての資料を報告したこととなる。一連の再検討によって得られた古墳時代前期後葉後半という築造時期に目新しさはないかもしれないが、梅原末治による報告以来、断片的にしかわからなかった出土品の情報が集約され、現在の研究水準で更新されたことに最大の意義がある。今後の興戸 2 号墳に関するあらゆる議論は、この確かな情報を起点に進んでいくこととなるだろう。とりわけ家形埴輪については石製品同様、複数の機関が所蔵しており、またかつて復元された際の石膏が付いたまま接合関係の再検討や資料化を進めたため、作業は困難を極めたが、試行錯誤の末に開発した三次元写真計測によるデジタル復元という新たな記録方法

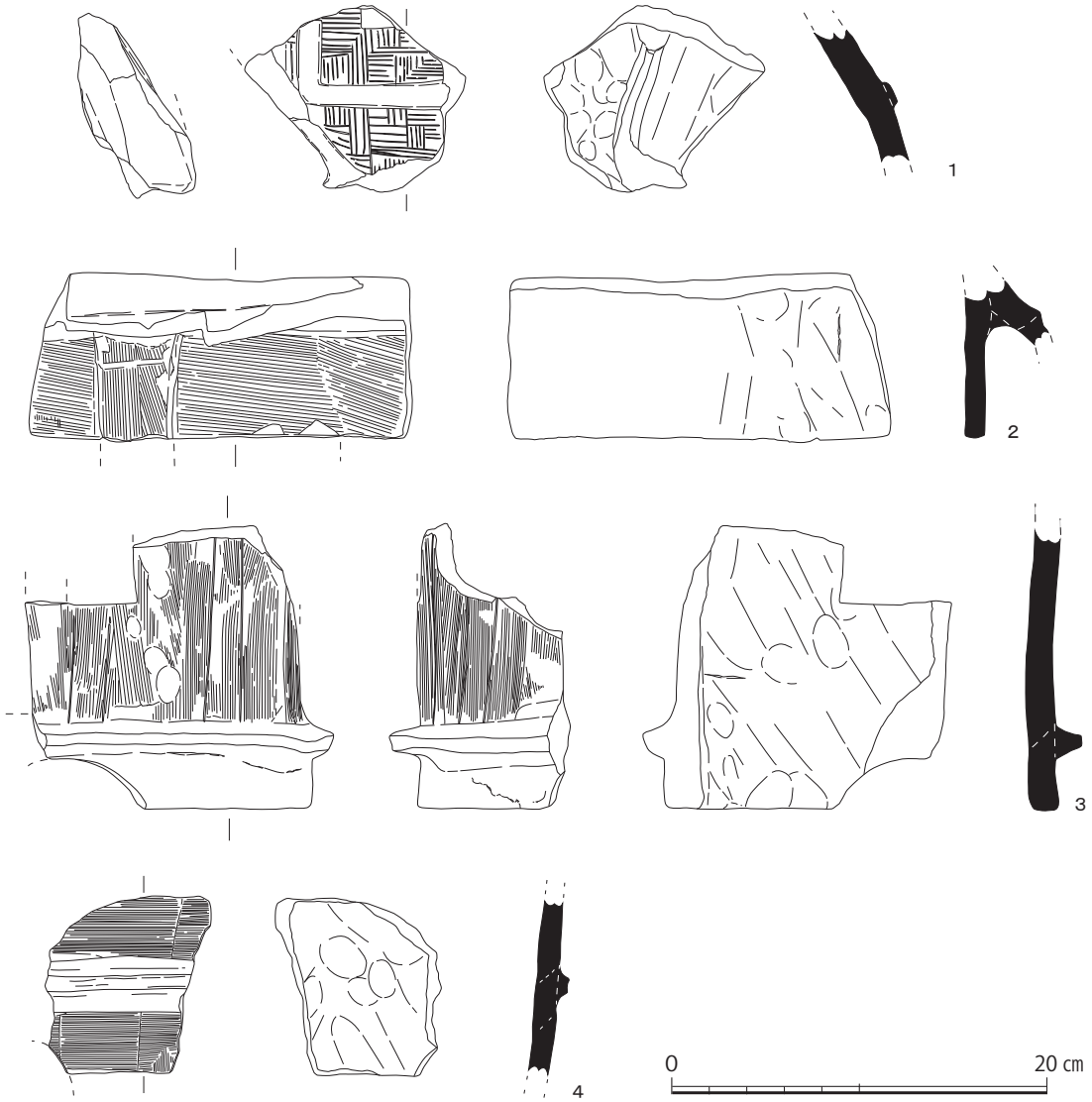

図 14　山城郷土資料館所蔵資料（S=1/4）（北山 2022）

により（本書第Ⅲ部第４章）、どうにか資料化を果たすことができた。関係各所の全面的な協力と実務作業にあたった関係者の努力に改めて感謝したい。

いま奇しくも、石製品（本書第Ⅲ部第５章）からみれば同時期、埴輪（桐井 2022b、吉永 2022）からみれば若干先行する可能性がある飯岡車塚古墳出土品の整理にも着手している。飯岡車塚古墳は墳長約 90m の前方後円墳で、竪穴式石槨を埋葬施設とするのに対し、興戸２号墳は直径約 28m の円墳で粘土槨を埋葬施設とするなど、直線距離約２㎞というまさに指呼の関係にある両墳の間には、明確な格差が認められる。一方で、前者の埋葬施設は南北主軸であるのに対し、後者の埋葬施設は綴喜古墳群に特徴的な東西主軸であり（下垣 2021、古川 2022）、両者に大量副葬された石製品の入手経路にも明らかな違いがあることもわかってきた（本書第Ⅲ部第５章）。最近発見された墳長約 81m の前方後円墳である天理山３号墳などの天理山古墳群についても埴輪から両者とほぼ同時期に相次いで築造されたとみられ（桐井 2022a・b）、前期後葉後半を中心とする極めて短期間に、木津川左岸の直径４km ほどの円の中で、立地を明確に異にしながら、三者が競いあうように築造されるという異様な状況も明ら

かとなりつつある。その意味するところについては後考を俟つこととし、ひとまず本報告を終えたい。（諫早）

註

1）本鏡が接合した経緯を坪井清足が記しているので引用しておく。「戦前、四條畷中学の片山先生がごく小さな鏡の破片を採集されました。その破片を梅原先生が戦後になってからご覧になり、「これは見たことがある」とおっしゃるんですね。何をご覧になったのかというと、京大に保管されている古い鏡に欠けているところがあって、その欠け方を丹念に観察しておられたということです。実際にその鏡に破片を当てると、ピタッとはまるんです（笑）。これは神わざだと思いましたね」（坪井 1998）。

参考文献

青柳泰介 1995「家形埴輪の製作技法について」『家形はにわ』（日本の美術 348）至文堂

青柳泰介 2007「家形埴輪の製作技法について再論」『埴輪論考』大阪大谷大学博物館

青柳泰介 2020「近畿地方中枢部における家形埴輪について」『埴輪論叢』第 10 号　埴輪検討会

泉眞奈 2022「家・囲・柵形埴輪」『埴輪の分類と編年』（埴輪検討会シンポジウム 2022 資料集）埴輪検討会

岡村勝行 1990「長原古墳群の家形埴輪」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会

岡村勝行 1991「家形埴輪について」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』（財）大阪市文化財協会

奥村清一郎・西川英弘 1981「１．興戸古墳群発掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第２集　田辺町教育委員会

小野山節・都出比呂志・黒川冨美子編 1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部（日本歴史時代）京都大学文学部

梅原末治 1955「第三　田邊町興戸の古墳」『京都府文化財調査報告』第 21 冊　京都府教育委員会

岡崎敬編 1977『日本における古鏡 発見地名表 近畿地方Ⅱ』（東アジアより見た日本古代墓制研究）

鐘方正樹・髙木清生・山上豊（編）2018『北和城南古墳出土品の研究―裁判記録に残る皇陵盗掘事件の真相―』由良大和古代文化研究協会

北山大熙 2022「6　興戸２号墳周辺表採埴輪」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会

京都大学文学部 1968「綴喜郡田辺町興戸寿命寺山・興戸古墳」『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部

京都府教育委員会 2003『京都府遺跡地図〔第３版〕』第３分冊

桐井理揮 2022a「考古学的検討」『天理山古墳群発掘調査報告書』京田辺市教育委員会

桐井理揮 2022b「古墳編年における綴喜古墳群の位置づけと他地域との比較」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会

清水康二 1994「倣製内行花文鏡類の編年―倣製鏡の基礎研究Ⅰ―」『橿原考古学研究所論集』第 11　吉川弘文館

下垣仁志 2011『古墳時代の王権構造』吉川弘文館

下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社

下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群』（季刊考古学 別冊 34）雄山閣

白石太一郎・設楽博己編 1994『国立歴史民俗博物館報告』第 56 集（弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成）

国立歴史民俗博物館
髙木清生 2018「３．興戸２号墳出土品の検討」『北和城南古墳出土品の研究―裁判記録に残る皇陵盗掘事件の真相―』由良大和古代文化研究協会
鷹野一太郎 1982「８．興戸古墳群」『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町教育委員会
高橋美久二編 1987『鏡と古墳―景初四年鏡と芝ヶ原古墳―』京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館
田辺町郷土史会 1959『田辺町郷土史―古代篇』
坪井清足 1998『考古ボーイの 70 年 研究と行政のはざまにて』（なにわ塾叢書 72）大阪府
名古屋市見晴台考古資料館 2014『埋蔵文化財調査報告書 70　志段味古墳群Ⅱ』（名古屋市文化財調査報告 87）　名古屋市教育委員会
奈良国立博物館 2017『北和城南古墳出土品調査報告書』
二村真司 2022「京田辺市興戸２号墳の石製品」『京都府立大学文学部歴史学科　フィールド調査集報』第８号　京都府立大学文学部歴史学科
林正憲 2000「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』第 85 巻第４号　日本考古学会
古川匠 2022「綴喜古墳群の地域的特性」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会
森浩一 1970「古墳出土小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論攷』吉川弘文館
森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観』第５巻（弥生・古墳時代 鏡）小学館
吉永健人 2022「京田辺市飯岡車塚古墳出土埴輪の再整理」『京都府立大学文学部歴史学科　フィールド調査集報』第８号　京都府立大学文学部歴史学科
和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 巻第２号　考古学研究会

表２　興戸２号墳出土家形埴輪片一覧

資料番号	部位	部位（細部）	接合関係	所蔵館	備考
1	底部～壁部		1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
2	基部	隅部	2～5	京大博	片山寄贈
3			2～5	京大博	片山寄贈
4			2～5	京大博	片山寄贈
5			2～5	京大博	片山寄贈
6		隅部	1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
7				京大博	片山寄贈
8				京大博	片山寄贈
9	裾廻突帯		9・10	京大博	片山寄贈
10			9・10	京大博	片山寄贈
11				京大博	片山寄贈
12	文様部		12・13・22	京大博	片山寄贈
13			12・13・22	京大博	片山寄贈
14			14・15・28	京大博	片山寄贈
15			14・15・28	京大博	片山寄贈
16				京大博	片山寄贈
17	柱	隅柱	1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
18			1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
19			1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	片山寄贈
20		隅柱		京大博	片山寄贈
21				京大博	片山寄贈
22			12・13・22	京大博	片山寄贈
23		隅柱		京大博	片山寄贈
24				京大博	片山寄贈
25			25～27・32	京大博	片山寄贈
26			25～27・32	京大博	片山寄贈
27			25～27・32	京大博	片山寄贈
28			14・15・28	京大博	片山寄贈
29	下屋根	隅部	1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
30			1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
31		隅部		京大博	坪井復元
32			25～27・32	郷土資料館	粟野寄贈
33		隅部		京大博	坪井復元
34		隅部（軒先）		京大博	片山寄贈
35		隅部（軒先）		京大博	坪井復元
36				京大博	片山寄贈
37			1・6・17・18・19・29・30・37	京大博	坪井復元
38		隅部		京大博	片山寄贈
39	上屋根			京大博	片山寄贈
40				京大博	片山寄贈
41		妻側上端		京大博	坪井復元
42		妻部閉塞		京大博	片山寄贈

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。（う）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第９号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
発　行　日　2023 年 3 月 30 日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2